
涙

抹茶小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙

【コード】

N9312J

【作者名】

抹茶小豆

【あらすじ】

涙：眼球の上外側の涙腺から分泌される液体。（広辞苑より）

少年の瞳に光る一筋の涙は、この世に存在するどんな物質よりも純粹で美しいものに思えた。彼の友人がその傍らに立ち、慰めるかのようにそつと肩に手を置くと、少年は一瞬振え、反射的に強くその手を払いのけた。

少年は今自分が泣いていることを恥じ、その涙を見られまいと、できる限り友人から顔を背けた。

「同情なんて、いらない」

それは、彼の精一杯の強がりだったのかもしれない。

必死に虚勢を張っていないと、心が萎えてしまいそうので、少年はその場に蹲り、思わず自分の膝を抱きしめた。

彼はまるで手負いの獣のように、ただじつと己の傷の痛みに耐えているかのようだった。

友人は彼からそつと視線をはずし、窓の外を見つめた。

日はすでに傾き、西の空が茜色に染まっている。

買い物帰りの親子連れが、楽しそうに手をつないで道を歩いている様は、どこまでも平和で幸せな光景だった。

いつもとかわらない、日常の何気ないその光景を眺めていると、あの惨劇のことなど忘れてしまいそうになる。

そう　　あの惨劇。

不意にあの惨劇が脳裏に鮮やかに蘇り、友人は思わず顔を伏せた。

窓枠にかけられた、彼の繊細な指先が、微かに震えている。彼はその衝動に耐えるかのように、きつく唇をかみ締めた。幾度か大きく息を吸い込み、己を制すると、意を決して静かに口を開いた。

「あれは、確かに不幸な事故だったと思う。

だけど、俺は決してお前に同情なんて、しない。

お前がもう少しだけ、気をつけていれば、あんな事故なんて起きなかつたはずなんだ」

少年は友人を見つめ、小さく頷いた。

「ああそうだ、あれは確かに俺の不注意が招いた事故だった。だけど、お前に俺の痛みはわからない」

もって行き場のないやるせなさ、憤り、後悔、自責の念が涙となって頬を伝う。

部屋の中には未だ生々しくあの惨劇の爪あとが残されていた。

純和風のその部屋に置かれた、古びた箆笥があらゆる方向を向いている。

その箆笥の上に置かれていたであろう、ガンプラたちが無残にあたり散乱し、衝撃の強さを物語る。

友人はなおも小刻みに震え、顔を紅潮させている。

「だけとお前…」

箆笥の角に足の小指をぶつけて……」

「笑うな！」

少年の鋭い制止の声が飛んだ。

その横隔膜にやがて鈍い痛みを感じ始め、軽い酸欠状態に陥るころ、彼の瞳にもまた、美しく光る一筋の涙が流れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9312j/>

涙

2010年10月11日17時12分発行